

ギリシアの小詩

ギリシアの小詩は、ふつうたいてい“詩銘”（Epigramma）を指している。詩銘は最初彫像や奉納品及び墓石に用いられたので、できるだけ文辞は簡潔、意は言外にあるようにしている。古人に言い得て妙な一首の詩がある。原意は、

- （1）詩銘は二行がちょうどよい、もし三行を超えるなら、それは詠史詩、
詩銘にはならぬ。

ローマ人はギリシアから詩銘の形式を取って、諷刺に多用し、そこで内容的に変化が生まれた。ラテン文学での詩銘の定義は次のようである。

- （2）詩銘はミツバチのように、三つのことを具えているべきである。
一つはとげ、二つは蜜、三つは小さな体。

のちにヨーロッパの詩人で詩銘を作る者は多くがこの言い方を応用したが、これは実際後からの変化に過ぎず、詩銘の本色ではない。ギリシア人から見ると、その条件はただ簡練という一つに過ぎない。ここに引くのは別に狭義の詩銘に限らず、併せて格言詩、恋愛詩及び断片を中に含む。というのはこれらの詩は種類は違っても、簡練という特色ではもともと同じであるから、わたしはそれらを総称して小詩というのである。

二千四百年前、三百のスパルタ人が温泉郷（Thermopylai）を守り、五百万のペルシアの大軍と対抗すること三日、全員が戦死した。詩人シモニデス（Simonides）が墓誌を作った。

- （3）外の人よ、ためにスパルタの人に伝語せよ、
我らはここに眠る、彼らの規律に従って、と。

これは世界で名を知られた小詩である。スパルタ人の精神を表しているだけでなく、かのギリシア文化特有の“節制”の徳をも文芸の上に明白に表現している。だが彼は深刻な風刺も作ることができた。これは当時の無頼詩人テムクレオンのために似せて作った墓銘である。

- （4）ロードスの人テムクレオンここに眠る、彼は多くを食べ、多くを飲み、
多くの悪い言葉を吐いた。

女詩人サフォー（Sappho）はキリスト前六世紀に生まれ、抒情詩を以て著名であり、『ギリシア詩選』のなかに三種の詩銘が残っている。いまその一つを取る。

- （5）漁師ラガンの墓に、父親のメニコスは網と櫂を安置した、
——辛苦の生活の記念に。

哲学者プラトン（Platon）は少年の時に多くの詩を書いたが、今彼の最も有名な二首を次に訳そう。

- （6）以前君は^{あけ}晨の星、人間世界を照らした。
いま死んで、死人の中に^{きんせい}長庚のように輝いている。
（7）わたしの星よ、君はまさに星を見ている、願わくば
身を化して天空となりて、多くの眼で君を見返さん。

第一首は傷逝の詩で、女性はアステル（Aster、意味は星）と言うから、とても巧妙に啓明〔明

けの明星]と長庚[宵の明星]とを使って彼女を際立たせている。第二首はふつうの“ねがわくば”式の情詩であるが、非常に巧妙に作られている。これはまるで月に向かいて人を思う類への動議のようである。ただ蒼白い月の光は普遍的にほとんど人を風狂に導くような魔力を持っているが、いまでは詩人の靈妙な想いが作り出すものでしかなかった。わたしの星とは、わたしの運命というようなもので、恋人の極めてよい代名詞である。古人は誕生の時のその日の星宿がその一生の禍福を主宰すると信じていたので、それらの関係を調べる占星術などがあるのだ。ギリシア文学は理想的に美に富んでいるけれども、アテネ時代以降の“詞章学”は、まさに一切の詞章学と同様、よい影響以外にやはり悪い影響をも与えた。これはもちろん後世に最も顕著になるのだが、われわれはプラトンの小詩を見てもやはり美妙にして危険に近いと感じる。文芸復興の末期の詩人の手になると繊巧穿鑿の“雅体”に変わってしまうことを免れない。

- (8) 乳香を君に送るのは、決して君を芳しくしようとてでない、
ただそれが君によってさらに芳しく薫るのを望むだけだ。

これは無名氏の一首である。上のものとまさに同じ類だ。以下はサフォールの断片の何章かで、この訳文について、ついでに少し説明しておく。わたしはただ原本のみが詩であって、訳すことができないばかりか、手を入れることもできないと確信する。誠実な翻訳はただ原詩の講釈解説のみ、教室で先生が唐詩を講釈して聞かすように、詩の意味を説くのだが、詩ではない。自分の訳をほんとうに詩とし、原詩の他にもう一篇佳作を添えたのだと考えるのは、許すべき誤りだけれどもとても可笑しい。——およそいわゆる翻訳の好詩とはすべて訳者の創作であって、フィッツジラルドのペルシャの詩のように、実際はただ“オマルハイヤームを読んで作った”だけである。したがってわれわれの最大の野心は詩意を述べるほかに、百に一の風韻を保存できたらしうにすぎない。これはギリシアの詩を訳す上で明らかに不可能なことであるとは分かっているけれども。サフォールの詩はことごとく散逸していて、次の五節はすべて断片で、完全な詩ではない。

- (9) 月は落ち、スバルも降りた。
まさに夜半、時は過ぎた。
われは独り眠る。
- (10) 愛はわたしの心を揺する、
あらしが櫛の木の上におちるように。
- (11) 愛はわたしを揺する、——肢体を溶かす愛、
苦く甘い、抗うことにできぬ物。
- (12) 甘棠が梢に紅く色づいている、
梢の頂上だから、果をとる人が忘れた。
いや、忘れたのではない、ただ届かなかっただけ。
- (13) たそがれよ、お前は一切を招き返す、光溢るる朝が追い払った一切を。
おまえは綿羊を招き返し、山羊を招き返し、子どもを母のそばに招き返す。
- (14) わたしは白いスマレを編もう、柔らかい木水仙を編もう

そして桃金娘を、
わたしはあの微笑む百合を編もう、
甘美なサフランを編もう、さらに紫のヒヤシンスを編みこもう、
恋人たちの愛するバラを編もう、——
香しい日の恵みの髪にかむせよう、
華鬢にして彼女の豊かで美しい長い髪を飾ろう。

この一首は二千年前の人メレアグロス (Meleagros) の作ったもので、その恋人日の恵み (Heliodora) に送ったもの。彼は東方の人でギリシアの文化・教育を受けたので、アレクサンダー時代の文学的傾向をすこぶるよく代表する。次の一首は無名氏の詩で、たぶんやはり同時代の作であろう。

(15) 蒲桃がまだ青いころ君はぼくを否んだ。
蒲桃が熟すと、きみは傲然と行ってしまった。
だがもう一粒を惜しんではいけないよ、
いまでは蒲桃は干からびようとしている。

(16) おれとともに酒を飲み、ともに年若く、ともに恋をし、ともに花冠を戴き、
狂う時はおれとともに狂い、醒める時もおれとともに醒める。

これは飲酒の歌の一つである。格言詩を一首、シモニデスの作と言われていて、すこぶる同様にギリシア人の現世主義を表せている。

(17) 健康は生きた人間の第一の幸福である、その次は先天的な美、
第三は正当な富、第四は友人の間で常に若さを保つこと。

しかし厭世思想も常に詩人の心胆を占めており、悲痛な歌を発して、衰亡の時代には特に甚だしい。次の三首はすべてこの類である。詩人の自悼の詩としては、最後の一首がさらに簡潔な概括である。

(18) 裸で地上に来、また裸で地下にゆく、なんのために徒労するのか、
結局ただ裸でしかないことが分かっているのに。

(19) わたしの名、——それがどうした？
わたしの血筋、——それがまたどうした？
わたしの家柄は高貴である。だがもし卑賤だったら？
わたしの生前は栄光であった。だがもし屈辱だったら？
わたしはいまここに眠っている。誰がそうした事どもを人に告げられるのか？

(20) かつて有ることはなかった、——わたしは今生まれた。
かつて有った、——わたしは今なくなった。それだけだ。
もしそう言わない人があつたら、彼は嘘つきだ。
わたしはもうじきいなくなるだろう。

以上二十章のうち、第四第八及び十五の三首は英文からの重訳であるから、あまり正確でないかもしれない。そのほかはその原意を保存することに努力したが、残念ながら保存できたのはや

はり原意でしかない。第十九首は原四行しかないが、配列の便宜上第一行を二つに分けて、いま五行とした。また四篇は、「小詩について」でかつて引用したことがあるが、いま改訳したので、字句の上で少し違うところがある。

※初出：1923年7月11日『晨报・文學旬刊』第5號